

Title	医薬品の流通構造と将来展望
Sub Title	
Author	長谷川卓郎(Hasegawa, Takurou) 青井倫一
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1989
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1989年度経営学 第711号 連絡が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001989-0711">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001989-0711</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名 長谷川 卓 郎  
(王水堂薬品株式会社)  
所属ゼミナール 青 井 倫 一 研

主査 青 井 倫 一  
副査 片 岡 一 郎  
嶋 口 充 輝

## 医薬品の流通構造と将来展望

この論文の目的は医薬品流通構造の現状と将来の考察を通じて、医薬品卸売業が流通構造の変革の中で対応すべき経営課題を明らかにすることである。

医薬品卸の経営の成果は、流通の参画者（行政、医療機関、メーカー、卸）からなる流通の構造によって既定されているものとし、初めに、流通構造の現状分析から卸の経営の成果とそれへの影響要因を設定した。次に、重回帰分析によって影響要因による経営成果の決定構造を解明した。そして、将来の流通構造の変化を予測し、変化の際、経営成果の決定要因が従来どおりの影響を及ぼすかどうかを考察した。

又、現在、卸が広域化、集約化を進める根拠となっている「規模の効果」について、その実効の真偽を実証分析するとともに、規模拡大の為の方策を比較し、その中で特に合併を取り上げ、過去の合併の正否を検討した。

その結果、従来の影響要因では、シェア率、セールス比率、各市場での生産性の高さ、付加価値率、トップメーカーの影響力といった要因が強い影響を及ぼすことが判明した。

しかしながら、将来の流通構造の変化とともに、シェア率、セールス比率、付加価値率といった要因の影響力は相対的に低下すると思われる。

又、規模の効果は人件費部分で効果が大きく、結果として税引き前利益に好影響を及ぼす（ともに有意差あり）が、大規模卸は自損が大きいのか粗利益に対しては統計的に有意差はでなかった。又、卸の規模別の比較では月商が100億円を越えると統計的に有意な効果がでることがわかった。又、今後の規模拡大の手段としては合併が最も効果的だと思われるが、従来の合併事例を分析した限りでは、必ずしも経営が改善されているとはいえなかった。

この研究の結果は、今後の、医薬品卸の経営戦略策定に重要な助言を与えるものである。